

演技者・時任純子―渡辺淳一『阿寒に果つ』論―

*

小田島 本有

ODAJIMA Motoari

Reformer・Tokitoh Junko—A study of Watanabe Junichi “Akan ni hatsu” —

一

れない。

渡辺淳一というと世間的には『失楽園』（一九九七年）や『愛の流刑地』（二〇〇六年）のイメージが強い。その彼が一九七一年七月から七二年一月にかけて『婦人公論』に連載した『阿寒に果つ』は作者のみずみずしい感性がうかがえる。ちなみに渡辺は七〇年に『光と影』で直木賞を受賞しており、このとき渡辺は三十七歳であった。その翌年から彼が『阿寒に果つ』の連載に着手したことの意義は大きい。単行本は七三年一月中央公論社から刊行された。ちなみにこの作品は七五年に映画化もされている（五十嵐じゅん、三浦友和主演）。

この作品のヒロイン時任純子のモデルが加清純子であり、彼女が女学校時代に道展入賞を果たし「天才少女画家」として脚光を浴びたこと、その彼女が五二年四月に阿寒（現在釧路市）の釧北峠で遺体となって発見されたこと（行年十八歳）、さらに渡辺が純子と同級生であり彼女が彼の恋人であったという事実はよく知られている。『阿寒に果つ』は渡辺が青春時代を振り返りつつ書いた作品であった。

後年、渡辺は純子との思い出についてこう語っている（※①）

いま、振り返ると、彼女との熱く異常な愛の体験は、その後のわたしを大きく変え、芸術、あるいは芸術的なものに目覚めさせ、硬派だったわたしを軟派にし、さらに愛と死を考えさせ、ある虚無的な感傷に馴染ませた。そしてなによりも、彼女との出会いがなければ、わたしは作家になっていなかったかもしれない。

純子との出会いは渡辺の人生を大きく変えてしまうほどの衝撃力を持ったのである。実際、『阿寒に果つ』の語り手「私」（田辺俊一）は高校時代、どちらかというと堅物の優等生として描かれており、学級委員の彼がクラスを代表して日頃の行状について純子に意見したことが二人の接近のきっかけになっていた。のちに残された加清純子の日記には、「クラスに生意気な男の子がいるので、誘惑してやる」と書かれており、この「生意気な男の子」が渡辺淳一である。作品を見ても「私」は時任純子にいつも翻弄されていたという印象を拭い難い。対等な恋愛とは言い難かった。

純子の葬儀のあと、傷心のためか一言も話さない渡辺を一人にできなかったと、昔の図書部仲間の一人は語っている（※②）。

加清純子はいずれ渡辺が心の整理をつけなければならない対象であった。彼はそれを小説という形で試みたのである。事件から二十年近くの月日が経過していた。渡辺からしてみるとラブレターをもらい、何度かデートを重ねたり、夜の図書室で密会を重ねたりした経験があるものの、その一方で彼女は男性関係が華やかであり、その中で苦汁を味わいながら最終的には彼女の自殺を知らされるわけだから、それら一連の出来事をどう整理をしたらよいものか、当時は途方に暮れる思いだったに違いない。

『阿寒に果つ』は序章と終章の間に六つの章が置かれてあり、それぞれの人物の視点を通して時任純子の人物像を浮き彫りにするという構成がとられている。ここでは参考までにそれぞれの章のタイトルと、そこで証言をする人物について示しておきたい。ちなみに各章の証言者のあとに括弧内で書かれているのは、モデルとして判明している人物の名前である。

序章

- | | | |
|-----|-------------|------------|
| 第一章 | 「若き作家の章」 | 田辺俊一（渡辺淳一） |
| 第二章 | 「ある画家の章」 | 浦部雄策（菊地又男） |
| 第三章 | 「ある若き記者の章」 | 村木浩司 |
| 第四章 | 「ある医師の章」 | 千田義明 |
| 第五章 | 「あるカメラマンの章」 | 殿村知之（岡村昭彦） |
| 第六章 | 「蘭子の章」 | 時任蘭子（加清蘭子） |
| 終章 | | |

序章では時任純子の遺体が釧北峠の雪の中で発見される場面が描かれている。純子の遺体が発見されたのは一九五二年四月一三日。第一章は遺体発見から二十一年が経過し、彼女と札幌南高で同級生だった「私」が彼女との思い出を語る。そして「私」は純子と生前関わりのあった人たちと会い、それぞれの証言を得ることで彼女の人物像を浮き彫りにしていこうと考える。「私」は純子を「六面体」と表現しているが、それぞれの人物と出会って話を聞くことで、今まで知り得なかった時任純子の姿が見えてくる。

純子は十五歳で道展初入選を果たし、天才画家として脚光を浴びた。このことは彼女にとつては必ずしも幸福ばかりをもたらしたわけではない。周囲の期待や注目が高まり、それ以後の彼女は天才画家を演じる必要が生まれたからである。このため「実像としての時任純子」と「虚像としての時任純子」との乖離がしだいに広がり、後者が肥大化する結果をもたらした。彼女はそのギャップの中で人知れずもがくことになったのである。今回私が明らかにしようとするのは天才画

家を周囲に対して殊更演じなくてはならない「演技者」としての時任純子の姿である。

各章における証言者として、「私」以外に少なくとも三名は実在のモデルがいる。菊地又男は加清純子を道展初入選に導いた画の師匠。作品中では菊池がモデルとなった浦部雄策が目余るほど純子の魅力に感嘆し、周囲が眉を顰めるさまが描かれている。岡村昭彦は左翼運動関係者で山村工作員として活動していたところ警察の摘発を受け（容疑は医師法違反、不法医療行為違反、釧路刑務所にいたところ純子が面会に訪れ、この後純子は自殺していることもあり、最後の恋人とも言われた。また純子の姉蘭子は作品の中ではたんなる姉妹とだけでは収まらない、純子との淫靡な関係が描かれている。

作品はかなり現実を反映した形で書かれているが、小説である以上脚色も入っている。この作品の中で登場する証言者たちは、いずれも純子との関係において程度の差こそあれスキャンダラスな描かれ方をされている。場合によっては裁判で訴えられてもおかしくない。ところが管見の限りでは、この作品の発表によるその種の揉め事は認められない。没年は菊地又男二〇〇一年（八十四歳）、岡村昭彦一九八五年（五十六歳）、加清蘭子二〇一二年（八十三歳）である。つまり、『阿寒に果つ』が発表されたとき、彼らはいずれも存命中だった。ちなみに蘭子・純子姉妹の父親である加清保も没年は一九七八年（七十八歳）なので、やはり存命である。この作品を書くにあたって作者が事前にどのような配慮をしたのかは分からないが、発表後に大きなしこりを残さなかったということが私には奇跡的なことのように思われる。

ただし、菊地又男は作品に登場する浦部雄策とは自分が明らかに違うという意識を明確に持っていたと思われる（※③）。

純子が中学三年生の夏休み、私は彼女と阿寒に三泊五日の写生旅行に出かけた。もちろん両親から承諾を受けた。
（阿寒湖温泉、傍線・小田島）

ある日、私は純子にこう言い渡した。

「純子は、私と師弟の関係だった。私によって、芸術家の生活の表裏を知りつくしたようだ。今までの私との世界を土台として、さらなる別な世界へ飛躍していけるように思えてきた。純子よ、お前はもう一人でやっていかれそ

うだ。私から吸収するものは十分吸いとったようだ。私も若い才能のある純子から、いろいろな面で知らなかった世界を発見させてもらった。

「どうだ、このあたりでしばらく会わないことにしよう。」「破門」とまではいかないまでも、お互い自分を見つめることが必要だと思おうが」

(略)

純子は規制や束縛を何より嫌った。感情のおもむくままに男と友だちになり、また好奇心の充足が何よりも優先する少女だった。画を描くためには、忍耐と自制が基本になければならないと思っている私には、純子の行動に目をつぶることができなくなっていたからだ。

(破門、傍線・小田島)

この引用から分かるように、菊地は純子と写生旅行をする際は両親の承諾を得ているし、純子が自由美術展に初入選したとき二人は上野美術館を訪れているが、その晩は菊地の兄(菊地精二・独立会員)宅に宿泊させてもらっている。作品のように秘密の行動をしていたわけではない。

また、菊地はある時期から純子の奔放な行動に耐えきれず、彼の方から破門を言い渡している。このことについて菊地は、「私の破門宣言によって、純子は生きる方向や支えを失って、一種の脱水状態になったのではないか」と述べている。姉の蘭子も、後に上京し青娥書房という出版社を興した。九五年には日野原冬子名義で追悼作品集を編んでいるが、そのタイトルが『わがいのち 「阿寒に果つ」』とも「遺作画集」であったことから、渡辺との関係が決して悪くなかったことがうかがえる。

三

渡辺淳一や加清純子が札幌南高に在学中、『青銅文学』という文芸誌が創刊され、彼らはここに所属していた。純子は表紙絵やカットを担当したばかりでなく、いくつかの小説もここで発表している。それらを読むと彼女が絵画のみならず文芸でも才能の片鱗を見せていたことがうかがえる。

『阿寒に果つ』では純子がこの文芸誌に「二重セックス」という小説を発表して話題を呼んだことが書かれているが、ここで説明される梗概と実際の「二重SEX」とは明らかな違いがある。両者とも主人公の少女が男装をして美男子に扮

し女性たちを誘惑するが、彼(実際は彼女)が美少女と同衾した際に秘密がばれてしまう点は共通するものの、「二重SEX」ではその美少女が妊娠を打ち明けた後、自殺を試み病床を訪れた主人公(水蒼^{みさお})に女性であることは分かっていたと打ち明け、間もなく死を迎えるところが大きく異なっている。『阿寒に果つ』では自分の正体がばれるのは夢の中のこととして処理されているが、渡辺は大きく改変していたのだ。

だがそれ以上に私が注目したのは、『阿寒に果つ』では登場してこなかった「藝術の毛皮」という小説である。この作品は加清純子の死後、三回にわたって連載されたが未完となっている。作品の冒頭では肺結核のため誕生日に亡くなった妹の真矢を前にして嘆く景子の姿が描かれる。真矢は将来を囑望された天才少女画家であり、光の女王のごとく多くの男性からの愛の告白を聞き流す存在だった。自分をモデルとした主人公が病氣のため夭折するという設定をしているところが興味深い。

姉の景子は小説家希望、妹の真矢は道展入選で注目され、その後は喫煙、飲酒を繰り返す一方で複数の男性たちと関係を持つ。その彼女も女学校にいた頃、化学の先生に初恋の感情を抱くものの失恋し、以後は変貌する。彼女は半ば押しかけで南條雄という画家のもとに弟子入りし、二人は何度もスケッチ旅行に出かけるが、南條はそのような経過の中で真矢に翻弄されていく。真矢の奔放な行動はこれだけに納まらない。姉の恋人である星川由紀男という新聞記者も誘惑する。嫉妬に駆られた景子は南條に純子の行状を伝えた。南條の生活はこれ以後荒れ、やがて彼はデパートの屋上から飛び降り自殺をする。そして景子は東京へ旅立ち、姉妹が訣別するところで作品は中断されている。

これを見ると、かなりの部分で『阿寒に果つ』と重なり合う部分があることが分かるだろう。というよりも、渡辺は『阿寒に果つ』を執筆するにあたり、加清純子を書き遺した「藝術の毛皮」をかなり参考にしたと考えられるのだ。

四

『阿寒に果つ』はかつて時任純子と深い関係にあった「私」が、彼女の自殺後二十年を経て、彼女と関わりを持った人々からそれぞれ話を聞き、改めて時任純

子を捉え直そうとする物語である。

後年、「私」は姉の蘭子から、姉妹の間で「私」(田辺)についてこのような会話が あったことを聞く。

「そんなこととして、友達に憎まれない」

「そうね、女の子はみんなあたしには一目置いてるけど、男の子には少し生意気なのがあるわ。この前も、田辺つて子が、あたしにいちやもんつけたの」

「なんて？」

「あたし一人、遅刻や早退で特別扱いうけるのはおかしいって、ホームルームで忠告するように決定したというの」

「で、どうしたの」

「あ、そうって、きき流しといたわ、ちよつとハンサムで、できる子なんだけど、ことさらにあたしを無視しようとするの」

「案外、あんたに気があるんじゃないの」

「そうかもしれないの、だから今度また生意気なことをいうようなら、近づいてやろうと思ってるの」

「放つといたほうがいいわよ」

「高校生の男の子は、アネキ興味ない？」

「いやらしいわ、そんなの」

「でも純情でいいものよ」

自分も高校生のくせに、と蘭子はおかしくなったが、純子は大真面目だった。

〔第六章 蘭子の章〕六、傍線・小田島

このあと純子が「私」に仕掛けてきたことは枚挙にいとまがない。

純子から手紙が来て、「私」の誕生日を祝いたいからミレットという喫茶店で待ち合わせをしようという。「私」はそれまで喫茶店に入ったことがなかった。

ミレットは芸術家たちの溜まり場になっており、「私」が店内に入るとその種の年上の男たちがいた。その中には浦部雄策や村木浩司などがいたが、作品を読むと彼らはあらかじめ純子からこの日は同級生の男の子を連れてくると予告されていたことがわかる。純子は彼らの視線を受けながら「私」と会っていた。純子は遅れて店内に入ってきて彼らと会話も多少しているから、「私」の嫉妬心を煽

ることを狙っていたのだろう。

あるいは、純子の誕生パーティーに「私」が招かれる場面がある。ところが、招かれたのは「私」だけではなかった。それだけでも「私」は落胆させられたのだが、そこで彼女はくじ引きをして当たった人間が彼女と接吻できるというゲームを提案する。このときは村本という男子生徒が当たり、彼らは皆が喝采する中接吻をするのだが、この光景を目の当たりにして「私」が気分を害するのは当然のことだった。

純子の策略はこればかりではない。雪像づくりの学校行事の中で、彼らのクラスは純子とその担当の中心となった。題材はロダンの「接吻」である。当初何人かのクラス仲間が手伝ったりもしていたが、いつしか彼女が殆ど一人で作業をするような状態になる。「私」は一度も手伝っていない。これには夜の図書室で密会をしていたこと、雪像が「接吻」だったこともあり、手伝うのを躊躇する気持ちがあったのは否定できない。このとき純子が雪像に血を吐くという事件が起きる。その後しばらく彼女は学校には現れなかった。この一件で「私」は純子が結核患者だと思い込んでしまった。だがこれは彼女の狂言だった。彼女は浦部と積丹をスケッチ旅行で訪れた際、旅館で階段から転落している。これも狂言であったことを彼女自身が告白している。このように彼女は行き詰ったとき、状況を打開したいと思ったときに意図的に狂言を演じる習性が見られる。

あるいは、「私」が純子に宛てたラブレターが紛失するという事件も起きる。結局その手紙は国語の戸津教師の手に渡り、彼から「私」に戻される場面が描かれている。実はこれも純子があえて紛失したように見せかけた偽装事件であった。そのような中、二年生の最後の春、二人で外を歩いていたとき、純子が「私」に「怖いことが起こりそうな気がしない？」と尋ね、「ねえ怖いから接吻をして」と強く迫る場面がある(第一章 若き作家の章)七)。このとき彼女の身体の震えは止まらなかった。このときの彼女の言葉は意外と本音が吐露されていたと言えないだろうか。

純子は失踪する前に「私」の家の前まで来ていた。一月一日のことである。窓から外を眺めると雪面に記憶のある足音が残っていた。純子の誕生パーティーが行われた七月以来、二人は個人的には会っていない。にもかかわらず、純子が失踪の直前に訪れていたことは「私」に強烈な印象を残した。彼女の失踪後、一月末の新聞では「天才少女画家阿寒で自殺か」という記事が出て、さらに翌日の

夕刊では、彼女が阿寒に向かう前に釧路刑務所にいた愛人、殿村知之を訪れ、保釈のための金を渡していたことが報道されていた。純子の友人の一人であった宮川怜子は「私」から失踪前の彼女の行動を聞いていて、「純子、あなたに最後に逢いに行ったのね」と語っている。この彼女の言葉を肯う気持ちがあったのだろう。新聞で殿村知之の名前が出て、「殿村」という男は純子が死ぬ前に偶然つき合っていただけの男さ」と私は自分を納得させていた。純子の遺体が発見されるのはそれから半月後の四月一三日である。

五

ところが、彼女の死から二十年後、「私」が彼女と関わりを持った男性たちと接触を持ち、話を聞いてみると意外な事実を知ることになる。

私が「純子は自分を一番愛していたのだ」と一人決めたように、浦部も村木も千田も殿村も、みな一様に、純子は自分を一番愛していたのだ、と信じているのだった。

その表現には、もちろん多少のニュアンスの違いはある。

浦部はそれを、純子との長く波瀾に満ちたつながりと、釧路に発つ雪の夜に、自宅まで訪ねてきたことから信じ、村木は最後のカーネーションを雪の山に置いていったことに頼り、千田は日記体の手紙を貰った親しさに頼り、殿村は釧路まで保釈の金を持ってきてくれた事実頼っている。

そして私は、夜、窓の下にあった足跡からそれを確信している。

(終章、傍線・小田島)

「私」が会った男性たちはいずれも自分と同じような思いを純子に対して抱いていた。その事実を知らされたとき、「私」の目には彼らは程度の差こそあれ自分と同類に見えたであろうし、そのことは「私」自身を対象化するきっかけにもなったのである。

こうなったそもそもの原因は言うまでもなく純子にある。彼女は失踪の直前、それまで関わりのあった男性たちのもとを訪れた。その後彼女が自殺したとなると、彼女の最後の行動はそれぞれの男性たちに鮮明な印象を残すことになる。こ

れらはすべて純子の意図的な行動であり、ここでも演技者としての時任純子の姿をうかがうことができる。そのことが分かってもおかつ「私」には二つの疑問が残っていた。それは「純子が最も愛していたのは誰であったのか」、もう一つは「何故、十八歳の若さで死んだのか」ということである(終章)。

六

『阿寒に果つ』を何度か読み返していくと気になることが幾つか浮かんでくる。一つは純子の身体である。彼女が少女ながら成熟した身体を持ち主であったことは、彼女と肉体関係をもった浦部雄策、純子の二回目の自殺未遂事件後に彼女の身体を診た千田医師が証言している。

浦部が純子と肉体関係を持ったときのことはこのように書かれている。

「好きだよ」

浦部はいま、自分の腕のなかにいるのは、一人の成熟した女だと思った。もはや弟子でも小娘でもない。自分が恋いこがれ、求めていた女だった。

純子の接吻は上手ではなかった。浦部の妻の豊かな動きから見ると、単純で、ただ唇をつき出しているというに過ぎなかった。だがもちろん浦部はそれで満足していた。十六歳の少女を奪う以上、技巧や変化を求めているわけではなかった。ただ誰も触れていない躰を知る、未知なるものを探り出す喜びで満足していた。

純子は少しも抵抗しない。その従順さに浦部は、かえって不安になり、浦部はそつと目をあけた。

驚いたことに純子は大きく眼を開いていた。唇を吸われ、両の頬をすぼめたまま純子はこちらを見ている。(第二章 ある画家の章) 四、傍線・小田島

純子は「成熟した女」であり、浦部に身体を預けているが、全く陶醉していない。抵抗することもなく、驚いたことに大きく眼を開いていたのである。同様な体験は村木もしている。村木と関係をもったときも彼女は「平然としていた」し、行為後も彼女は「さばさばしていた」。「一人の女性から抵抗を除き、体を奪っておきながら、村木には初めての女性に接した時に感じる勝利とか、征服に似た感

じはなかった」のである（「第三層 ある若き記者の章」一）。おそらく純子はいつもこうだった。事実、浦部はその後も何度か純子と関わりを持つが、そのときの彼女の冷やかな態度は変わることがない。そのため浦部は「彼女が処女ではなかったような気」もしていた。

純子が浦部の前に現れたのは十四歳の春である。それから一年半、純子と身近に接してきたが、浦部はまだ純子のまわりに男の影を嗅いだことはなかった。といって、自分と逢う以前に純子に男がいたとは思えない。処女でなかったというのは、やはり自分の錯覚だったのだろうか。（第二章 ある画家の章「五」）

千田医師が自殺未遂をした純子の診察にあたったのは彼女が十七歳のときである。

「正直いつて初めて診た時、これが十七歳の少女かと吃驚しました。顔はあどけなかったけれど、乳房や腰の発育は完全に大人のものでした」

「じゃあひと目で処女ではないと……」

「そうです」

（「第四章 ある医師の章」一）

処女ではないと千田医師が判断したのは、この時点で彼女が浦部や村木と肉体関係を持っていた事実と符合する。だが、浦部は純子の態度を通じ、彼女の処女を当初から疑ってさえたのである。十四歳で弟子入りして以後、男の影が感じられなかったという彼の発言との整合性はどうか考えるべきなのだろうか。

そこで考えられるのが姉蘭子の存在である。

この姉妹の父親は「高名な教育者」であったが、「家庭では厳しい父親」であった。そこには「独善的な横暴さ」も含まれており、それだけにこの姉妹はこの父親から逃れ、互いに共感を強めていく。その頃から二人は床の中でしつかり抱き合う癖がついたのであった。そして、このようなことを繰り返すうち蘭子には何かいけないうことをしているという「罪の意識」が生まれた。そして、二人の間に姉妹以上のある親しさを感じたのが、純子十四歳の秋である。

やがて数分も経つと純子はそろそろと頭を擡げた。それは温まったところで、

そろそろ抜け出そうとする猫の仕草に似ていた。蘭子は純子が布団から顔を出すのだと思った。顔を出し、新しい空気を吸うのだと思った。

だが次の瞬間、蘭子は突然右の乳首に、ある優しい感触を覚えて、身震いした。

「どうしたの……」

蘭子は純子の頭を払い除けようとしたが、離れない。純子のやわらかく、温かい唇がゆつくりと乳首をとらえている。それはどこかむずがゆく、甘い感触であった。

「気持ちいい？」

やがて純子が顔をあげ、悪戯っぽく笑った。それを見て蘭子ははじめていま受けていた行為の羞しさに気がついた。

「馬鹿ねえ止めて」

「でもよかったでしょう、今度はお姉ちゃん、あたしにして」

純子はというと、大胆に胸を上げた。蘭子は一旦、躊躇し、それから薄く色づいた乳量のなかに落ち陥んだ乳首へ唇を触れた。

（「第六章 蘭子の章」二、傍線・小田島

このようなことはその後も繰り返された。この姉妹がレズビアンになったのはこれが最初である。言ってみれば、純子の性の目覚めは蘭子によってもたらされた。その後純子は複数の男性たちと肉体の交わりを持つ。その姿は放縦そのものと言つていいくらいだが、彼女をそうにさせていたものは何だったのか。浦部や村木が「私」に語っていたように、純子は彼らと関わったときに全く陶醉していない。つまり彼女は快感を得られなかったのである。だからむしろ快感を得ようとした。それが彼女の放縦な態度に繋がったのではないか。その点で、彼女を「恋のボヘミアン」と称し、「私は純ちゃんは今恋をしていたというより、むしろ恋に憧れていたのではないかと思うのです。憧れていたというより、飢えていたといったほうがいいかもしれません」と述べていた千田医師の言葉は正鵠を射ていたと言えよう。彼はまた、「純ちゃんは、あなたが仰しやるいろいろな男性との恋とは別に、もう一つ、別の愛の形を持っていたような気がするのです」とも述べていた（「第四章 ある医師の章」一）。

純子は阿寒での自殺行の前に二度自殺未遂をしている。一度目は女学校二年の

時、二度目は高校二年の冬である。

前者は失恋が原因だった。このことについては千田医師、蘭子の証言がある。純子が恋したのは安斎という理科教師（仇名はアンチョロ）だった。だが、この教師は江原という純子の一年上の教え子に心を奪われており、それを知った彼女は面当てのように理科実験室で昇汞水を飲んだのである。しかし、そのことで安斎の心は逆に離反することになり、やがて彼が江原と結婚することになったのを知ることになる。それを知った純子は、これから「あたしはデーベ（注・結核）になる」と蘭子に宣言し、咳き込む様子を見せて仮病を装い、オキシフルで拭いて髪の色を変えることを始めた。後年、蘭子は「彼女（注・純子）は結局、誰が一番好きだったのでしょうか」との「私」の問いに対し、「やはり安斎先生だと思います」と答え、「その先生に失恋してからは、すべての男の人へ、復讐するために近づいたのだと思います」と述べていた（第六章 蘭子の章）九。根底に男性たちへの復讐が込められていたのであれば、彼女が彼らと肉体的な交わりを持ったとしてもそれが快感を伴うものでなかったのは当然のことであった。

高校時代、雪像に血を吐いた（それはもちろん狂言であったが）純子を見て彼女を「私」が結核だと思い込んだのはそのような流れの中であった。ただ、この一件以来彼女は学校をしばらく休むことになる。「私」は彼女が結核のためと思い込んでいたが、実はこのとき純子は二度目の自殺未遂を図っていた。このことについて、純子は蘭子に「絵が描けなくて、生きていくのなんて『免だわ』『死ねばそれでいいし、助かれば、自殺未遂のおかげで、もう少し天才少女でいられるでしょう』と語っている（第六章 蘭子の章）七」。天才少女画家としての時任純子を演じ続けることに、当時の彼女が行き詰まりかけていたことがうかがえる。だが、同級生であった「私」はそのときそのようなことは思いも寄らなかったのである。

七

蘭子と純子が仲の良い姉妹以上の、ある種レズビアン的な濃密な関係に陥っていたことは先ほど述べた。

蘭子には早くに絵画で有名になった純子に対する複雑な思いがあった。蘭子自身、小説家として世に出たいという願望があっただけに、彼女からすると純子は

羨望の対象でもあり、手の届かない存在でもあったのである。蘭子は女学校卒業後、とある繊維会社に勤務した。その社長が駒田といい、かつて日新聞社の記者も務めた男である。彼女は父親ほど年の離れた駒田に将来小説家になりたいという希望を語り、駒田も彼女にいろいろなアドバイスをし援助もしてくれた。その中で二人は接近していくが、しよせん蘭子は駒田の愛人にすぎずそのことに彼女はいつしか倦怠感も覚えていたのである。

彼女は駒田の紹介で日新聞社の村木を知る。村木はいわゆるプレイボーイであり、蘭子はすぐに夢中になった。その様子を傍で見ていた純子が「アネキを、そんなに夢中にさせた男に逢ってみたいな」と言ったのは、たんに言葉のうえだけのことでなかった。

先述したように、この姉妹は幼い頃から添い寝する習慣があった。蘭子が村木の下宿を訪れて交わりを持つと、その男の匂いを純子は敏感に察知する。純子は姉の身体に残った匂いから、その日姉は村木のもとを訪れたことを知るようになっていたのである。一方、村木も当初から蘭子の妹に対して関心を抱いており、巧みに純子に接近し二人は親密になる。

のろのろと床にはいつてくる純子を、蘭子は待ちかねたようにとらえた。肩口を引き寄せ、腕のなかへ抱えこむ。その瞬間、蘭子は妹の体がいとも違うのを感じた。純子の体は、どこか怯えたように堅く、緊張している。

「どうしたの」

蘭子はさらに抱き寄せ、顔を純子の胸元にすりつけた。蘭子が純子の体のなかにある、別の匂いを感じたのは、その時であった。本当にそういう匂いがあったのか、あるいはその時だけ嗅覚が異常に発達していたのか、いま思い返しても蘭子にはわからない。だが間違はなく、それは「一人の男の匂いであった。」

「誰かと寝てきたのね」

瞬間、純子の体がぴくりと動いた。

「村木さん？」

「……」

「村木さんなのでしょう」

黒く大きな瞳で、純子がうなずいた。

それからあと、どうしたか蘭子はよく覚えていない。ただ力のかぎり純子の

肌を打ち、押えつけ、最後に抱きしめ、力果てたのを覚えている。

〔第六章 蘭子の章〕五、傍線・小田島

これ以後、この姉妹の添い寝がなくなったわけではなかった。その後の一カ月を蘭子は「忘れられない辛い時期」と回想しているが、このころ、姉妹は同じ男に抱かれ、その後二人は「二人だけの秘められた密儀」を行う。「男となにをしてみたか、それを想像し、憎しみあうこと」で、「二人だけの世界にとびこめる」という泥沼の状態に落ち込んだのである。

だが、このままではいけないと判断したのは蘭子だった。蘭子は社長の駒田との縁を切り、東京へ行くことを決意する。会社も経営が傾いていた頃であった。別れを切り出された駒田はその一週間後、デパートから飛び降り自殺した。この辺は加清純子「藝術の毛皮」の記述を渡辺が借用したのかもしれない。

上京を決意してからの蘭子はおもはや心に揺るぎがない。だが、駅まで見送りに来た純子はやや常軌を逸している。汽車が動き出したとき、駆け出した純子が姉に向かつて「お姉ちゃん行ったら死んじまう」と叫んでいるし、最後は「ホームの先端で彼女は両手で顔をおおったまま、うずくまっていた」のである（第六章 蘭子の章「八」）。

八

蘭子が東京へ行くことを決めたのは三月の半ばであった。札幌を発った日は朝から曇り、午後から曇になったという記述があるので、いずれにせよ春のうちに彼女は上京したのである。

その後何度か蘭子は純子からの手紙を受け取っており、そこで純子の近況はおおよそ知ることができた。

その中で注目すべきは、年が明けた一月十日、純子から一枚の速達の葉書を受け取っていることである。そこには「謹賀新年」のあとに「お姉ちゃんすぐ帰ってきて」の一行が書かれていた。蘭子は二月になったら帰れる旨の返事を出したが、純子の失踪は一月十八日である。おそらく純子は蘭子がすぐには帰省できないことを知り、ほどなくして姿を消したのだった。純子が姉にすぐ帰省することを迫った理由は何だったのか。このことを含めて失踪前夜ともいべき頃の純子

の行動は不可解なことが多い。

その一つは、千田医師のもとを正月の半ば過ぎに純子が突然訪れたという一件である。松の内は一月十五日までである。だとすれば純子が訪れたのは一月八日か九日ぐらいということになるうか。彼女が蘭子に速達の葉書を出した頃とほぼ重なる。

「どういう用件ですか」

「診断書を書いてくれ、というのです。内容は体が悪いから子供を堕したほうがいい、という意味の医師の診断書が必要だったのです」

「じゃあ彼女が妊娠していたのでしょうか」

「私もそのことをきいたのですが、自分ではなくて、お兄さんの恋人が必要なのだ、というようなことをいっていました」

「お兄さんの恋人のために、彼女がわざわざ来たのですか」

「書いて欲しいといった診断書の名前も純ちゃんではなかったような気がします」

「でもそれを使って自分が堕すこともできますね」

「やる気になればできるでしょう」

〔第四章 ある医師の章〕二、傍線・小田島

そもそも本人の身体を診ないで診断書を書くということじたい考えられない。純子はかなり無理難題なことを千田医師に求めたのである。もちろん、千田医師はそれには応じなかった。

気になるのは引用部分の最後の箇所である。たとえ他人の診断書であっても、自分がそれを利用して堕胎することは全く不可能とはいえない。

純子は妊娠していたのではないか。彼女がそれまで複数の男性と肉体関係を持っていたことを考えると、そのことは驚くに当たらない。だが、彼女はその事実を突きつけられ動揺したのではないか。彼女が姉に早く帰省することを速達で要請したのは、妊娠という抜き差しならない事態に直面し頼れるのは姉しかないなかつたからだと考えられる。厳格な父親には到底打ち明けられる性質の話ではなかった。

純子は一月半ばにも再び千田医師のもとを訪れている。診断書を書いてくれと

頼んでからおそらく一週間ほど後のことだろう。二、三千円ほど貸してほしいというのが要件だった。このとき、彼はあげるつもりで千円を渡した。すると翌日純子はまた現れ、しばらく釧路にしばらく旅行に行くことを伝えた。そしてこれが純子と顔を合わせた最後になったのである。

仮に妊娠していたのが本当だとしても、当時の状況からすると墮胎そのものは無理だった。姉に頼ることもできず、墮胎もあきらめざるを得なくなった純子は自殺の方へ吸い寄せられていったのではないか。既に天才少女画家を演ずること自体に限界を感じていた彼女である。このとき彼女にとって死が身近なものになった。

彼女が釧路を旅行先に決めたのは、言うまでもなく当時の恋人殿村知之が釧路刑務所にいたからである。そして、彼女は札幌を離れる前、それぞれの男性たちのもとを訪れている。このことが「純子は自分を一番愛していたのだ」と彼らにそれぞれ思わせる要因ともなった。彼女は最後まで「演技者」だったのである。純子は殿村と面会し、彼に保釈に必要な金を渡している。その後彼女は阿寒を訪れ、そこで自ら命を絶った。

阿寒はかつて浦部が純子と写生旅行に訪れた場所である。失踪直前の一月十八日の夜、純子は浦部のもとを突然訪れている。路上で浦部が純子の頬を打ってから五十日近くが経過していた。このとき、純子は浦部に抱きしめられながら、「あたし、先生と一緒にの時間が一番安心ができるの、だから先生と冬の阿寒へ行くことを考えていたの」と語っていた（第二章 ある画家の章）九。その純子がまもなく失踪し、やがて思い出深い阿寒で自殺したのである。世間は殿村が純子の最後の恋人であったと受け取っていたが、そのことは浦部には大したことではなかった。「純子は私たち二人のために阿寒を残し、そこで死んだのですから」と語る六十歳近くの浦部が語る姿を目の当たりにしたとき、「私」には純子の演技が見事に成功したことを感じたに違いない。

いずれにせよ、時任純子は最後まで「天才少女画家」を演じきった。それぞれの男たちに強烈な印象を残したという点でも、彼女の思惑通りだったのである。

九

「私」はこう述べている。

考えるうちに私は純子が、類まれなナルシストであるように思われてきた。自ら結核を装い、嗜血をし、自殺をする。少年の私を惹きつけて突き放し、姉の恋人の村木を横取りする。それらはすべて、自分の魅力を亢め、それをたしかめるための方策ではなかったのか。

二度の自殺をはかったことも、千田に日記帖の一片を見せたことも、村木にカーネ이션を与えたことも、すべて自分へ人々の関心を惹きつけるための行為でしかない。

最後に雪の阿寒で死んだことさえ、自分を美しく見せるための演出ではなかったのか。

さまざまな男達と愛しあったように見せて、その実、純子は自分しか愛していなかったのだ。

（終章、傍線・小田島）

かつての「私」は失踪前に純子がわが家の窓の下にやって来たことから、彼女は自分を一番愛していたとの思いを長い間払拭することができなかった。だが、四人の男たち、さらに蘭子の話をそれぞれ聴いていくなかで、「純子は誰のものでもない」という、実に単純かつ平凡な結論に到達する。そのことによって、少なくとも「私」は自分を対象化して捉えることが可能になった。ここまで辿り着くまでに二十年近くの月日を必要としたのである。

それでも純子が自分を愛していたとの思いが完全に消えたわけではない。だが、他の男たちも自分と同様であることを認められる地点には立てている。それが現在の「私」には大きな意味があるのだ。

だがこれで、私はもう純子につながる青春のすべてを、過去の抽出のなかに納めることができる。それは片がついたものとして、年月という風化のなかに静めることができる。

これを書き終えたことで、これから私は、純子は純子として、自分とは切り離れた形で見つめることができる。

（終章）

『阿寒に果つ』は小説とはいいながら、渡辺淳一の過去が色濃く反映された作品だった。純子との出会いによってかつて硬派だったはずの渡辺は軟派に変わり、

純子の自殺という衝撃的な事件をずっと引きずらなければならなかった。いずれにせよ、純子とのことは何らかの形で片をつけなければならなかった。医師を辞め本格的な作家として歩み始めた渡辺にとって、その片をつけることが何よりも重要だった。甘酸っぱさとほろ苦さを兼ね備えた作品として、『阿寒に果つ』は今後も生き続けるに違いない。

【注】

(※①) 渡辺淳一「私がもらったラブレター」『ラブレターの研究』所収、集英社文庫、二〇〇五・二)

(※②) 鶴田玲子「純子さんのこと」『渡辺淳一作品集』月報13、文藝春秋、一九八一・二)

(※③) 菊地又男「純子と画」(加清純子著、日野原冬子編『わがいのち「阿寒に果つ」とも 遺作画集』、青娥書房、一九九五)